

偶然の出来事とその後

偶然の出来事がその後の生き方を変えることがある、とよく言われる。私にもそんな経験がいくつかある。その中から二つを紹介したい。

ずいぶん昔、大学1年のことである。入学して間もないころ、友人と二人で、サークルの部屋を探してキャンパスの中を歩いていた。旅という名のついたサークルのポスターを見かけ、部室を探していたが見つからなかった。そのとき、ちょうど、そこに、たまたま通りかかった人に尋ねたのだった。後でわかったがその人は4年生だった。

これからその部屋に行くところだから一緒に行こうと言い、連れて行ってくれた。見るとその部屋には、違う名前の看板がかかっていた。首をかしげている私たちに先輩は、こっちのほうで絶対いいよ、旅にも行くよ、という説明をしてくれたのだった。

半信半疑でそのまま部屋にいくと、人が集まってきて打ち合わせが始まった。自然観察や登山、子ども向けの自然観察会などをしているサークルとのことだった。そのまま自己紹介させられ拍手で迎えられた。その日なんとなく居心地のよさを感じた私たちは、翌日からその部屋に出入りするようになった。

このサークルは、私にとってかけがえのないものとなった。大学時代だけでなく、その後半世紀たった現在まで付き合いは続いている。あのとき、あの場所に、あの先輩が、ちょうど通りかかって、騙して連れて行ってくれた偶然に感謝、である。

次は、もう少しあとの話だ。卒業して会社で就職した。著名な会社だったが、仕事は私には合わなかった。迷い我慢しながら数年勤め、転職を決意した。

教員採用試験を受験してなんとか合格でき、中学校に臨時講師として勤務しながら、採用の連絡を待っていた。3月に教育委員会から連絡があった。

知的な遅れのある子どもたちの養護学校(現・特別支援学校)で採用したいという連絡だった。まったく未知の世界であった。私は、返事を少し待ってもらうことにした。勤務していた学校の同僚たちにそのことを話すと、残念そうな反応をする人ばかりだった。5年くらい我慢すれば通常の学校に移れるよと話す人もいた。また我慢か、ついてないな、と私はあまり気持ちが悪くなくなっていた。

そんなとき隣の席の同僚が飲みに誘ってくれた。同僚は友人を一人連れてきた。養護学校勤務とのことだった。酔った私は、転職したこと、採用について迷っていることなどたくさん話をした。夜も更けて、同僚の友人は私にこんなことを言った。

よかったね、やりがいのある仕事だよ、あなたは絶対向いていると思うよ、と。

そんなことを言ってくれたのは彼だけであった。迷いが吹っ切れた私は、翌朝に教育委員会に電話し、「ぜひ、やらせてください」と伝えたのだった。

ちようど養護学校の義務設置が定められた時期だった。数多くの養護学校が開校し、それまで学校に通えなかった子どもたちも、誰でもが学校に通えるようになった。子どもたちもその家族も喜びに満ちていた。学校は活気にあふれていた。

四月から勤務が始まり、大いに魅力を感じた私は、「5年の我慢」ではなくその後四十四年、特別支援の世界に身を置くことになった。

採用の連絡、同僚の友人、養護学校の義務設置の時期といったいくつかの偶然が、その後の生き方を大きく変えたのだなと感じている。